

令和4年度 一般社団法人農村文明創生日本塾

地域塾 フォーラム 2022 in 小松

～持続可能な里山運営を考える～

議事録

日 時：令和4年10月11日(火) 午後12時集合

令和4年10月12日(水) 午前11時40分解散

日程	時間割	摘 要
第1日目 令和4年 10月11日 (火)	エクスカージョン：こまつ里山魅力開拓コース	
	12:00	J R小松駅 集合 バス移動
	12:10	昼食：『LAGO BIANCO』(木場潟) 白山と木場潟景観の視察
	13:10	バス移動
	13:40	日用町『苔の里』視察(多様な苔が鑑賞できる日本有数の名所。自然や生活文化についてガイドを受けながら、全国農村景観百選に選ばれた美しい里山集落を鑑賞)
	14:10	バス移動
	14:30	滝ヶ原町：石切り場／アーチ型石橋群／TAKIGAHARA FARM 視察 小松市の石の文化「珠玉と歩む物語」の構成遺産である滝ヶ原石の石切り場や全国的にも珍しいアーチ型石橋群が今なお残る
	15:40	バス移動
	16:00	江指町ジビエ利用拠点『Gibier Atelier 加賀の國』視察
	16:20	バス移動
	16:40	宿泊施設チェックイン
	18:00	交流会：『梶助』
第2日目 令和4年 10月12日 (水)	フォーラム：持続可能な里山運営を考える	
	09:00	観音下(かながそ)町西尾地区のシンボルであった かつての学び舎をコンバージョンした滞在交流施設『オーフ観音下西尾』内覧会
	09:40	シンポジウム開会
	09:50	基調講演『持続可能な里山運営を考える』：白肌 邦生 氏 (北陸先端科学技術大学院大学 知識科学系 准教授)
	10:20	休憩
	10:30	事例発表 ・小松市の里山振興と旧西尾小学校跡地活用事業について(小松市長 宮橋 勝栄 氏) ・日用苔の里の取組について(日用苔の里整備推進協議会副会長 有川 宗樹 氏) ・小松市における学生参加型の地域活性化関連活動について(金沢大学 人間社会研究域地域創造学類環境共生コース 准教授 林 直樹 氏)
	11:10	
	11:20	意見交換会
	11:30	講評：農村文明創生日本塾 有識者理事 宮口 侗迪 氏(早稲田大学名誉教授) 里山活性化協議会会長 高 富師彰 氏 挨拶・閉会

第1日目

「JR小松駅」に集合し、木場潟の畔にある昼食会場『LAGO BIANCO (ラーゴ・ビアンコ)』までバスで移動し、石川県小松市経済環境部農林水産課の山崎次長の説明を聞いた後、昼食を摂り、参加者同士交流しました。

食事終了後、銘々で木場潟公園を散策しました。



木場潟より白山を望む



『LAGO BIANCO (ラーゴ・ビアンコ)』の外観と食事会場



皿やトレーには小松で採取した滝ヶ原原石などを使用

その後バスにて、多様な苔が鑑賞できる日本有数の名所である『苔の里』に移動。自然や生活文化についてガイドを受けながら、全国農村景観百選に選ばれた美しい里山集落を鑑賞しました。



『苔の里』の視察風景

続いて、200人、70世帯ほどの小さな集落である滝ヶ原町を訪れ、平成28年に日本遺産に登録された小松市の石の文化「珠玉と歩む物語」の構成遺産である滝ヶ原石の石切り場や全国的にも珍しいアーチ型石橋群を視察しました。近年は築100年の古民家を改装して作られた農泊施設やカフェに国内外から人が集っているとのこと。今回は里山自然学校こまつ滝ヶ原の学校長を務める山下氏にガイドと地域振興の取組みについて講演をいただきました。



石切り場視察の様子

第1日の最後の視察は、ジビエ活用の中心的な拠点『Gibier Atelier 加賀の國』です。

これは、国内最高水準の衛生管理を行える施設で、「ジビエ利用モデル地区」である南加賀地域の生産加工拠点として「国産ジビエ認証」取得を目指しているそうです。



『Gibier Atelier 加賀の國』の視察

第2日目

2日目は、西尾地区のシンボルであったかつての小学校の学び舎をコンバージョンした滞在交流施設『オーフ観音下西尾』を内覧した後、「持続可能な里山運営を考える」をテーマに、フォーラムを開催しました。



小学校の校舎を今コンバージョンした「オーフ観音下西尾」の外観と施設内部

フォーラム2022 in 小松：持続可能な里山運営を考える

一般社団法人 農村文明創生日本塾代表理事である田中南砺市長の挨拶の後、小松市宮橋市長より挨拶があった後、北陸先端科学技術大学院大学 知識科学系 准教授白肌邦生氏の基調講演、事例発表、意見交換会を行い、最後に、早稲田大学名誉教授で農村文明創生日本塾の有識者理事である宮口侗迪氏の講評をいただき、幕を閉じました。

■ 挨拶：田中農村文明創生日本塾代表理事

皆さん、おはようございます。今日は、地域の方にもたくさんお集まりいただき、ありがとうございます。今日は、農村文明創生日本塾のフォーラムとして、3年ぶりに現場で開催することができました。宮橋市長はじめ、小松市の皆さんにはお世話になり、感謝申し上げます。講演される方々も、お忙しい中ありがとうございます。昨日から、現場視察として里山活性化協議会の皆さんにもご協力いただきました。



私たちの団体は、農山漁村の過疎などで、合併などにより村が無くなっていくなかで、もう一度、農山漁村の価値、素晴らしさを皆で考えようではないか、そして、持続可能な農山漁村の素晴らしさを、次の世代にどのように伝えていくかを議論しようということで、全国の有志が集まり、ネットワークを作ってきました。先ほども申し上げたとおり、新型コロナの影響で、このような催しや、現場でのフィールドワークもできなかったのですが、今回、小松市で開催することができて、とても嬉しく思っています。

遅くなりましたが、私のところは隣です。宮橋市長から、山の中だと言われましたが、私のところは利賀村というもっと山の中です。私の出た小学校も、廃校になりました。廃校になった市長の会が作れるくらいです。

農山漁村は、このような大きな経済の流れの中で、こちらのような廃校を利用した素晴らしいレストランや、宿泊施設であり、これを日本全国に広げていくことが必要だと思います。

昨日は、苔の里や、石切り場を見学しました。その際感じたことは、日本人よりも海外の方には、絶対喜ばれる、ということです。今の時代、SNSでどんどん情報発信していくことだと思います。もっとも、あまり広めたくない気もするのですが。

今日は一日、皆さんと一緒に、大いに学ばせていただきたいと思います。皆さん、よろしく願いいたします。簡単ですが、私からのご挨拶といたします。どうぞよろしく願いいたします。

■ 挨拶：小松市 市長 宮橋 勝栄 氏

皆さん、おはようございます。本日は、「令和4年度農村文明創生日本塾フォーラム2022 in 小松市」を地元の施設で開催できることを嬉しく思っています。日本各地からお集まりの首長理事、有識者理事の皆さんに御礼申し上げます。また、日ごろから様々な活動をされている里山活性化協議会の皆様はじめ、多数の方にご参加いただきありがとうございます。

昨年、田中代表理事から小松でのフォーラム開催を打診され、今年4月には正式に会に参加しました。今回、開催できることは嬉しく思います。里山、農村地域には様々な課題がありますが、それらは共通していると思いますので、議論し合っていくことが必要だと思います。

小松市としても、このような活動を通じて、農村文化をしっかりとつなげていきたいと思っておりますし、ふだんから活動いただいている方々とも、ネットワークを広



げて学び合い、農村をレベルアップしていく、そんな一日になればと思っていますので、どうぞよろしくお願いたします。本日はお越しいただいたことを、心から感謝申し上げて、開催地としてのご挨拶とします。ありがとうございます。

農村文明創生日本塾メンバー、来賓の紹介の後、基調講演に移りました。

■ 基調講演：白肌 邦生 氏

北陸先端科学技術大学院大学 知識科学系 准教授

皆さん、おはようございます。北陸先端科学技術大学院大学の白肌です。お時間 30 分ほど頂戴しました。わかりやすくお話したいと思います。持続可能で、次世代に伝えたい小松の里山ということで、この 10 年ほど関わった経験をお話したいと思っています。私は経営学、マーケティングを専門にしてきましたが、リーマンショックの後、オーバーマーケットでモノを買え、ということの後押しした反省も込めて申し上げます、ヘンリー・ソロはマサチューセッツ州のウォールデンという池畔で 2 年間自給自足をしていたのですが、



私たちが暮らすこの好奇心をそそる世界は、便利であるが不思議だ、有益である以上に美しく、消費されるよりも称賛され喜ばれる、と言っています。これは解釈が難しいのですが、一つひとつのキーワードを見ると、「便利」「有益」「消費」という経済社会の芯です。その反面、好奇心をそそる不思議なものというメッセージ、まさに、農村文明塾の考え方は、このように西洋人と同じ考え方なのか、と感じました。

私自身、縁があつて学生と一緒に、小松のさまざまな里山を歩き、少しお手伝いもさせていただきながら、持続可能な里山について関わって 10 年になります。私の大学は大学院大学で、4 年制大学を修了した人が、修士や博士を目指しています。いわゆる「おとな」です。こうした大人の学生が自然に対峙しながら経営学、マーケティングについて考え直すということです。里山を維持する皆さんの姿を見てきました。

昨日、久々に美しい光景を見てきました。今回の視察にはありませんでしたが、切ると断面が真っ白の、非常に珍しいタケノコ、これを「色白美人」としてブランド化しようという動きも、東山地域を中心にあります。もちろん、滝ヶ原地域、観音下（かながそ）にも、里山の持続的発展のシンボリックなものがあります。

私の研究室のOBが住んでおります中ノ峠町では、8 月後半の大雨で土砂崩れと洪水となりました。これも自然の脅威だと改めて実感します。ここから回復するなかで、住民同士の助け合い、この経験を後世への伝承意識が働き、それが行われているのではないかと思います。

小松市の特徴ですが、人口 10 万 8 千、土地面積に対して自然割合が高い、可住地は 3 割で、静岡県富士宮市、愛媛県西条市、東京都青梅市などが面積、人口などで差異はありますが、構成としては近くなっています。それぞれの土地において、自然に触れあうなかで、例えば富士宮では富士山の恵みのなかで青木平という里山保全に力を入れています。西条市は西日本最高峰の石鎚山があり、棚田再生、林業を中心にした活性化などによって里山保全活動をしています。土地に応じた地形を利用して、持続可能な里山づくりが行われている中で小松はどうか、という話になります。

研究室活動としてフィールドワークを行うとき、「里山π(パイ)街道」という名前を付けてみました。2015 年の里山学会で披露したのですが、小松市と栗津温泉、山中温泉を結ぶ直線から髭のような形に伸びる特徴ある里山を結ぶと、このような字につながるということです。小松市の自然が持つ、豊かな暮らしへのヒントが無限に存在する、ということをお人々に教える観光の価値、それらのルートをたどることにより人々の交流が生まれ、新しい縁を生み出す、これと円をかけてπという名前を付けた、という我々の印象です。

サイエンスヒルズ小松という科学館が駅前にあり、そこに何か展示してほしいという要望がありました。工学系の大学ですと、何かを実験した装置や、その結果を目に見える形として表現しやすいのですが、私ど



も文系ですと、本1冊を展示するのもおかしな話ですので、どうしたら小松市の素晴らしい里山を紹介できるだろうか、と悩みまして、当時、日用町の苔をいただきこのようなジオラマを作りました。さらに大学らしくしようと、ラズベリーパイという制御コンピュータを付けました。来場者が霧吹きで水をかけると、センサーで反応し、その部分の説明がスライドで出る、という仕組みにしました。苔はそこに展示して乾燥してしまうと、枯れて

しまいます。日用町に行けば、川が流れていて杉の日陰の部分で湿っている、そのような環境ですから、この展示している苔も湿っている状態が大好きですから、来場者が苔に水をかけることで苔も喜び、楽しみながら小松を理解してもらおう、という工夫をしました。これはなかなか良いアイデアだと思っています。

農村文明、農山漁村に根差した個性豊かで多様な文化や暮らしという定義ではありますが、僭越ながらこれを語らせていただくなかで、私は民俗学の人間でもありませんし、環境専門でもありません。また、ビジネスを実際に運営する実務家ではなく、むしろ、サービス経営、知識科学といった知識の分野で立ち向かってきた者です。知識科学というのは知識の継承、皆さんが表現しにくいが持っている暗黙知を、どのようにしたら共有できるか、ということを考えている学問です。

人間の記憶には限界があり、記憶のネットワークをどのように持続させるか、誰かが知っていれば、自分がその情報をすべて持つ必要はないわけです。まさに、人間同士の関わりであったり、コミュニティの持続性だったりするわけです。知識科学という言葉は仰々しいですが、我々の生活や、里山を考えるうえでもフィットする話なのだと思います。最近では、高齢化のなかで、知識を創造する活動が生活の楽しみになっています。生き方の張り合いにもなりますので、そのようなことを研究しています。

中ノ峠町の柿の木について、そこに住んでいるか人にお話を伺うと、最近では熊がよじのぼって柿を食べるそうです。怖くないかと聞くと、怖い仕方がない、熊も生きているからということでした。山に食べ物がなくて深刻なようです。この地区では、柿の葉の押しずしが有名です。当時は鯨を入れて食べたそうです。硬かったけれど、美味しかったそうです。滝ヶ原の彼岸花は、訪れた人に楽しんでいただけるように植えたそうです。

前置きが非常に長くなりましたが、私がやっている研究、「サービス経営、サービスマーケティング」についてです。サービスというと、「おまけ」というイメージもありますし、人間の手で何かを行うという印象も持たれると思います。より厳密に言うと、「活動」です。サービスには目的があります。相手に幸せになってもらいたい、そういう意図がないと、サービスがうまく価値を生み出すことができません。活動の質の向上のためには、相手にこのサービスを受けてよかったと思ってもらえるためには、お互いが価値を共有すること、共創が大事です。コミュニケーションです。これが核になります。

そして、忘れてはならないことは、人間同士だけでなく、自然と人間が価値を共創する姿も昔からあるということです。あとで、日用町の事例のところでお話ができると思います。知識がどう里山に受け継がれ、持続可能な運営になって行くかということも、大きなテーマになります。小松の里山が維持されてきた背景には、関係者が常に工夫しながら愛着の持てる知識の創造を推進してきた、ということもあるだろうと思います。現場の人は、自然についてよくご存じですから、工夫等もできるのですが、初めてこちらに来た観光客の方はそれが分かりません。現場の人の暗黙知というものが通じないので、一回来たらおしまい、ということになってしまいます。そこを何とか工夫したい、そのための一つのキーワードは「体験を共有すること」、同じ現場を共有すれば、そ



ここで何らかの暗黙知が伝わっていく、これが我々研究のメッセージなのです。これを実際に、滝ヶ原がやっている、ということが見事なところですよ。

里山での体験交流を共有する、そして自然学校という拠点に戻って、意見交換する。お互いの気づきを共有しながら里山の新たな価値を、その人の言葉で表現する。そうすると、愛着を持って里山を見ることができ、というサイクルができ、自然学校の取り組みとなります。ポスター展示や、昔の新聞記事の切り抜きなどがあり、昔ならではの知識を保管し、来訪者が自分ながらの知識をつけていくのです。体験を通じた共有化、暗黙知の共有という取り組みで、これらは工夫の積み重ねで、敬服しています。滝ヶ原賛歌は地元の人がCD化しましたが、観光客が読んだだけでは通り過ぎてしまうようなことを一回体験したい、現場の人と共有することで腑に落ちていく、牧歌的な詩だが滝ヶ原の自然と人間との関わりを見事に表現していると思います。

日用町は苔で有名になりましたが、長年の積み重ねがあります。自然の生態というコミュニティとの共存関係が見事に表現されている、人間コミュニティは、日用神社を起点とする地域のコミュニティ、一方で、人口減少を原因とする存続の難しさがあります。コミュニティが日用杉を中心とした自然生態系を守ってきた。その一つとして、苔が見事だった。ほかにも、茗荷は取れるし、夏には蛍も見られます。このような恵みの中で、苔が自然に育ってきた。そうすると、苔に注目する専門家が現れる。そして、専門コミュニティができる。残念ながら、苔の専門家が亡くなられたあと、どうやって苔を維持するかとなると、苔と建物のセット、この景観に着目して古民家再生が始まります。国連大学の関係者が訪れたという話もありますが、外国人にとって彼らが何を見ているかということ、人間と自然の生き方そのものなのです。神社が作り出すコミュニティと景観、人間と自然の生き方に関心を寄せる人たちがたくさんいます。彼らをファンにして、巻き込みながら持続させていく取り組みです。

言葉でいうと簡単ですが、現場では試行錯誤しながらネットワークを作り上げていくことが見られます。このような自然に対する考え、白山信仰ですが日用町の人には、神社はいつもきれいにしておかななくてはならない、という価値観があります。このような里山の資源を今でいえば観光地化して生かそうというマーケティングがありますが、価値のつながりを考えなければいけない。我々が他の地域を視察したときに思うことは、単にアイデアだけで進むと、一過性で終わってしまいます。コアには担い手の思想が無ければなりません。価値を協調的に作り出すということがメッセージです。根底にある価値観、行動をきちんと理解できるように現場の人たちを巻き込むことが持続可能につながっていくのです。沖縄でフィールドワークをしましたが、やちむん（焼き物）がどうして続いているか、それはシーサーに対する畏敬の念があります。多くの人たちが意識を共有しています。

新しい担い手の話、小松の里山は、五感を刺激するということを新しい担い手は注目して活性化につなげています。まさに夢のかたまりです。彼らは多くのアイデアをもって、このような自然のなかで子育てできるようなサービスを作っています。ジビエの担い手として小松市で活躍しています。こうした夢のかたまりが次世代の小松の資源をより魅力的に、着実に、現場の人たちと信頼関係を築きながら進めていくことが大事なことです。外から来てこのようなことがいきなりできるか、というとなかなか難しいですが、そこをどう作っていくか、ということが彼から学べることだと思います。

これからの里山は、新しい担い手とともに、デジタル化、ウェルビーイングをどう生かすのかを考えなければなりません。見える化の推進、スーパーシティ、デジタル田園都市構想などもありますが、地形の3Dマッピング化で防災につなげること、人間の豊かな生活をどのように加速化させるか、ということも考えなければなりません。地産地消をもう少し広げていくこともテーマです。

長くなりましたが、次世代に伝えたい、白山信仰に根を張った自然と人間の協調的な関係で成長する価値のシステムがあると思っています。これは読めばわかるのでしょうか。資料はたくさんありますが、腑に落ちなければなりません。粘着性の強い暗黙知は外に取り出すことが難しい知識が多いので、担い手と一緒に活動することでわかることも多いのです。究極的には、心の中に里山を持つことも必要かもしれません。武道の達人はすべてが道場に見えるらしいのです。人生の困難があってもそれをはねのけ、他者を思う心があるようです。里山という関係性、サークルエコノミー的な経済、環境を考えたとき、このような精神を心に持つことが非常に大事なのだと思います。これで私の話は終了します。

■ 事例発表①：小松市の里山振興と旧西尾小学校跡地活用事業について（小松市長 宮橋勝 栄 氏）

小松市の里山振興と、旧西尾小学校跡地の活用事業についてお話しします。このような会を、町中でなくこのような体育館で行うことは嬉しく思います。

小松市は石川県の南部にあります。小松空港と、建機メーカーのコマツでご存じの方も多いと思います。1年半後には北陸新幹線の小松駅も開業する予定です。空港と新幹線の2つが備わっています。

町のイメージは、先ほどの白肌先生の話にもありましたが、小松市の約7割が森林です。昨年からは市長として、小松を明るく、にぎやかにというテーマで、持続可能な成長を目指すという観点で市政を進めています。6つの都市目標を掲げていますが、ものづくりが誇りの産業創成都市こまつ、自然が映え文化が息づくふるさとこまつ、これらが里山振興に関連のあるものだと思います。コロナ禍のなかですが、小松を賑やかに変えていきたい、そんなことを心がけています。

里山につきましては、2015年に全国植樹祭が木場潟で開催されています。また、農産物を使った、特に米、トマトの生産が多いところですので、六次産業化を進めています。小松市独自のブランドとして、「みょうこう柿」「さるなし」の栽培をしています。また、先ほどの話にもあったタケノコなどもあり、農村と都市をつなげる食育も大切だと思い、推進しています。昨日見ていただいたジビエも、もともとイノシシという有害鳥獣対策として進めていたものです。現在では、なかなか入荷できないのですが、農産物の開発を目指しています。

多様性を育む地域づくりとして、合宿所などもあります。自然学校も旧滝ヶ原分校で開催され、週末にはキャンプ場も賑わいます。都市と地域の創生では、古民家を利用したカフェや、宿泊もできるようになっています。地域活動も盛んです。

人材の観点からは、小中学校や高校と連携しながら、様々な学習フィールドを設けています。これらは、今日ご参加いただいている、里山活性化協議会の皆さんが、子どもたち、大学生たちとの協働の取り組みの後押しをしてくださっています。今年度の事業として、循環型林業について、2015年に全国植樹祭がありましたが、これをつなげていこうという取り組みも進んでいます。

平成30年3月31日に閉校した西尾小学校、私は第20代の卒業生ですが、45年の歴史に幕を閉じ、跡地活用事業として今後どのようにしていくかを、皆さんと一緒に協議したのですが、今年7月にオーフとして開設させていただきました。公設の施設ですが、民間の運営としてやっている施設です。民間の方々に入っただけでなく、独自採算でしっかり事業を成り立たせていただく、ということで事業を行っています。一方で、公金を入れた、皆さんにも思い入れのある小学校の施設ですので、公の施設としての役割もしっかりと担っていくということで、開設2ヵ月目で、学生の皆さんにフィールドワークをしてもらっています。地元の大学生、地域の方を中心にワークショップを開くなど、学生交流の拠点となるような活動をしています。

また、市民の皆さんにも、もっと来ていただきたいと思い、レストラン・オーベルジュの事業もしています。カフェは、気軽に来ていただけることを心がけています。アートを見ていただく機会も作っていきたいと思います。このようにアクティビティを充実させることで、公の施設として、しっかりと運営したいと思っています。民間と連携した施設であり、継続した事業としていくことを考えていきたいと思っています。今後、インバウンドが回復しますと、小松空港は台湾からの直行便がありますし、ここのシェフは台湾での修行も積んでいますので、力を入れたいと思います。

私からは以上です。ありがとうございました。



■ 事例発表②：日用苔の里の取り組みについて

(日用苔の里整備推進協議会 副会長 有川宗樹 氏)

皆さん、こんにちは。日用苔の里整備推進協議会の有川と申します。よろしくお願いいたします。

先ほど、白肌先生のお話で、私の申し上げたいことをお話しいただいたので、私からはそれ以上お話しすることはないのですが、苔の里の活動と、叡智の杜プロジェクトの現状について、お話しさせていただきます。

苔の里のある日用町は、小松市の中心から車で約30分、90%以上が山林となっています。住人は山間に暮らしており、約20名、昔から林業を生業としており、日用杉を生産しております。近年では苔庭が注目され、各地からお越しいただいております。日用町の苔庭が成り立った要因は3つあります。まず、気候や地形による環境、次に日照条件を整える杉林、そして代々の住民の生活文化、これらがそろって、さらに長い年月をかけて、苔庭と百年杉と古民家の景観が生まれました。



日用町では、それぞれの家で苔庭がありました。昭和62年に、苔の愛好家が移住してこれ、住民から苔庭の一部を借地して、「苔の園」を開園しました。これのおかげで、日用町の知名度は上がったのですが、一方では、観光客のマナーにより、住民の生活に支障が出る面もありました。愛好家の方が亡くなり、苔園は平成21年に閉園しました。

平成の地方創生により、全国的にまちおこしブームが起り、日用町でも平成10年ころに、当時の住民有志で村おこし運動がはじまりました。平成12年には「日用苔の里整備推進協議会」を設立しました。他の住民の協力も得て、苔の園ライトアップイベントを開催したところ、来訪者も増えたのですが、少人数での運営であり、徐々に活動は縮小しました。苔の園が閉園し、協議会の活動も縮小している時期に、古民家の調査で、黒崎さんが日用町に来られました。苔庭の景観に注目し、住人と一緒に景観維持を模索しました。

黒崎さんは、滝ヶ原の企画や、東京青山で開催されたファーマーズマーケットでは、地方と都市をつなぐ活動をしています。黒崎さんのネットワークのおかげで、海外の方々が何人も日用町にお越しになりました。海外の方々の評価やアドバイスは住人にとって、とても新鮮なものでした。そのおかげで、地元は改めて日用町を再認識することができました。

国連大学のコンラッド学長が、この景観を「Forest of Wisdom」と称されたことで、プロジェクトの名称が「叡智の杜プロジェクト」となりました。平成24年、プロジェクトは、日用町の景観を次世代につなぐため3つの課題を掲げました。1つが受け入れ体制を整える、2つ目が景観整備を行う、3つ目が古民家再生、これらを3つの柱としました。また、このとき一般社団法人叡智の杜を設立し、協議会との役割分担をしました。そして、平成26年春から、「苔の里」として再び開園しました。このとき、観光化に抵抗のある住人もいました。そこで、観光地の賑わいを目指すのではない、また、代々にわたる住民の輪を大切にすること、これを大切にしています。

叡智の杜プロジェクトの具体的活動としては、来訪者の受け入れ体制を整えて、定期的に住民がガイドとして案内しています。最近では、コロナの影響で縮小気味ですが、今年6月より少しずつ再開しています。また、交流人口を増やして、ボランティア活動の協力を求めています。苔の里サポーターというボランティア制度で、住民として受け入れています。

景観整備をして価値を高める、こちらについては継続的な苔庭清掃を行い、景観を維持する。さらに苔を栽培することで、苔庭の面積を拡大することにも取り組んでいます。古民家の改修を行い交流施設にする、空家になっていた古民家を改修し「Wisdom House」として広く一般の方々にも貸し出しています。

この時の改修費用は、支援者方の寄付金と補助金を使わせていただきました。

「Wisdom House」のテーマは、叡智を持ち寄り、叡智が生まれる、ということです。基本的に交流目的の事業にお貸ししています。来訪者や苔の里サポーターとの交流、各種会議、ちょっと変わったところでは結婚式やジャズコンサート、このようなことも、いろいろな方との交流という目的として使われています。



交流事業として、住民と協働で清掃活動する苔の里サポーターも、楽しく活動しています。先週土曜日に、通算 60 回目の作業を行いました。住民による清掃活動の様子ですが、住民だけですと少ないので、公立小松大学の学生さんと一緒に掃除をすることもあります。「Wisdom House」を利用した結婚式も今までに 12 件行われています。

東京のミュージシャンをお招きして催したジャズコンサートでは、古民家にたくさんのお役さんが来られて盛り上がった、アットホームなコンサートでした。

来訪者からの率直な感想、アドバイスとして、いろいろな方から声をいただきました。海外の方からのご意見では、「普段捨てている苔が、こんな景観を創造するとは驚きだ」という意見をはじめ、私たち住民は気づかないようなことをおっしゃっていて、より新鮮な気持ちになりました。

アメリカのスポーツブランドのナイキのデザイナーチームが、いらっしゃったときには、この中の 1 人がご自分の新婚旅行を兼ねて日本に来られ、このとき苔の里を訪れたいということです。

スウェーデン元駐日大使のクムリンさんからのアドバイスとしては、「何事もバランスが大事なので、この静けさを失わないよう注意して活動するように」ということでした。

小松市と姉妹都市のベルギー、ビルボード市のボンテ市長からは、「大きな変化はいけない、変わる時は少しずつ、時間をかけて」というアドバイスをいただきました。

ドイツからいらしたロズウィッターさんは、「来訪者に親切になり過ぎると観光地になってしまうので、わかりにくくて良い、ここはそういう場所だから、あまり親切にならなくてよい」ということを言われました。こういったアドバイスをいただきながら、私たちの活動を続けています。

平成 28 年の歌会始のときに、秋篠宮真子様にご苔の里の歌を詠んでいただきました。「広がりし苔の緑のやはらかに人々のこめし思ひ伝わる」。こういった優しく、気持ちに残る歌を詠んでいただきました。



ここ数年は、コロナ禍により人の活動が制限され、難しい時期となりました。また、この 8 月には豪雨災害も受けました。いろいろの活動のあり方が、私たち日本でもその時々で苦勞しながら、日用町に住み続けたことで、庭が機能します。黒崎さんや、海外の方々との交流で始まった叡智の杜プロジェクトは、現在お越しいただいた方や、サポーターとの交流を基に支えられています。これからも、幅広い交流と、住民の輪を大切にしながら次世代につなげられるように模索したいと考えています。私からのお話は以上になります。

■ 事例発表③：小松市における学生参加型の地域活性化関連活動について

(金沢大学 人間社会研究域人間社会系 准教授 林 直樹 氏)

皆さん、こんにちは。金沢大学の林と申します、今日は約10分ほどなのですが、学生参加型の地域活性化活動についてお話しします。自己紹介ですが、私はもともと農学部出身です。農業工学をやっており、村づくりを考える農村計画学会に入り、環境の生態系をやり、2017年度から金沢大学で研究をしています。

私のゼミは、まちづくりと農村整備について考えていますが、3つの柱を大切にしています。お金や人も、減るから増やす、ということが基本です。まずは拡大の活性化をしっかりと考えたいと思います。ただ、実際には日本の農村集落は10万以上ありますが、活性化して常在人口が増えているところは少ないのです。減ったから増やす、も大切ですが、それが難しいのであれば、減るならば減っても大丈夫な次の姿、持続可能な農村の可能性を維持した、次の可能性を維持したまま、しっかりと考えながら縮小しよう、ということです。

それから、複数の未来を想定して、複数の対応策を考えようということで、将来はわかりません。私が学生だった90年代とは、いろいろなものが変わりました。そうであれば、今後30年はわからない。農村の持つ潜在的な力を、少ない人でどう創造するか、これら3つのことを考えています。

ゼミは2017年からスタートし、最初は3人という小さなものからでしたが、今は10名以上となっています。2017年から小松でご協力をいただいております、小松の集落で交流型のワークショップを行いました。このワークショップの興味深いところは、2回やっていますが、1回目はA集落、B集落の住民がA集落に集まり、A集落のために話をする。B集落の方々は、うちのB集落の話をしたと思うところはあろうかと思いますが、それは我慢していただく。2回目は、B集落に集まり、B集落のことを話し合った。複数の交流型ワークショップでは、どうしても自分の話をしてしまうのですが、このように2回設定することで、建設的なものになりました。



西侯のふるさとまつりについてですが、西侯では常住人口は少ないのですが、元住民が非常にまめに通うところで、まさにここは、これからの農村の姿を先取りしているのではないかと、思います。ここに入り、2017年から、少しでも貢献できればと、参加しています。コロナにより、2019年より後は参加できていませんが、西侯らしさとは何か、ということに学生が考察しています。

内木町では、柿の新しい食べ方について考えました。地元の方々と、新しい食べ方の座談会を行いました。2020年には、香りにより地域づくりができないか、とワークショップを行いました。

小松市花立町では、国勢調査の人口はゼロですが、元住民がこの地区に通って清掃活動を行っています。ここで民族知継承の活動を行いました。生活の知恵を調べました。小学校の過去、未来について話し合いました。

岩上町では、草刈りに少しでも楽しい要素を加えようと、学生の企画により、草を刈りながら迷路をつくりました。

2022年からのワークショップ計画では、時間の都合上、詳細は申し上げられませんが、このように企画しています。時間となりましたので、これで終わりにします。ありがとうございました。

● 意見交換

佐々木北海道遠軽町長：苔の里にしても、こちらの施設にしても、素晴らしいと思いました。私のところ、遠軽町は農村過疎地を3か所持つのですが、行政として何とかしなければいけないと対策し、2つの地域では住民の人にも納得していただけた。一番小さな100人くらいの集落では、養豚をしているのですが、なかなか、それぞれの地域で意見は分かれます。そこには、小学校、中学校がありますから、廃校にはできないのですが、それぞれの地域で意見は分かれます。苔の里を大事にしようという人たちと、スーパーやコンビニを持って来いという人たちに分かれます。このあたりの調整は難しいので、こちらのようによくやっているやり方は、どうすればよいか、伺いたいと思いました。



田中代表：やはり、市民の皆さんの力だと思います。小松訪問で感じたことは、民度というか、住民の方々のパワーを感じられます。私のところも廃校がありますが、このような例はとても参考になります。

外山川場村長：群馬県川場村です。今、林先生のお話にもありましたように、減るなら減っても大丈夫、というどこの地域でも人口減少問題は否めない課題ですが、地域を守っていこう、これから何かしようという思いはあっても具現化できない、そういう中で昨日、今日で、いろいろ見た中で、地域の皆さんがしっかり残そう、という気持ちが表れていると思います。川場村でも令和7年に、小中一貫校を立ち上げる、ということで中学が廃校になる予定です。こちらの使い方を参考にさせていただきながら、廃校後、朽ちないようにしっかりと頑張っていきたいという思いを強くしました。ありがとうございました。



長谷川群馬県南牧村長：私の村も人口が1600人で、今日の話伺い、小松では都市部にも人がいて里山に暮らす人も含め11万人ということで、私どもはすべてが農村部で、しかも田んぼがないこともあり、全く同じではありませんが、ボランティアの話や、私たちのところでも帰って努力していきたいと思っています。



岡部福島県古殿町長：福島県古殿町です。ひとつ感じたことは、行政が進めようといういろいろと取り決めた施設だと思います。ところが、整備するだけでなく、大事なことはやっていただける住民からは施設を作っても自分たちではできない、という意見も出るはずで。しかし、市民の皆さんがまずやろう、ということで取り組む姿勢はとても参考になりました。



石森福島県玉川村長：見学してとても感銘しました。感じたことは、地方自治体だけではできないと思いました。やはり、市民の力はとても大きなものだと思います。村でも参考にしたいと思います。

兵頭愛媛県鬼北町長：それぞれの方々が、自分の持ち場、まちづくりの持ち場、生活の持ち場を大切にしている、それがまちづくりにしっかりとつながっていることを勉強させていただきました。本当にありがとうございました。



田中代表：時間に限りがありましたが、首長の皆さんの意見をお話いただきました。農村文明創生日本塾のホームページに、今日のご意見を含めて議事録を掲載しますので、全国の同じ課題を持つ市町村の方々と共有したいと思います。今後も、小松市の皆さんとはいろいろとご協力いただくことも多いと思います。今日は良いお話を聞かせていただきました。特に、地域の皆さんの力が改めて大事だと感じましたので、今後のまちづくりに生かしていきたいです。ありがとうございました。



● 講評：農村文明創生日本塾 有識者理事 宮口侗迪 氏（早稲田大学名誉教授）

皆さん、こんにちは。小松市の皆さん、ありがとうございました。私は、農村文明塾で有識者理事として活動させていただいております。早稲田大学を辞め、年寄りになりましたが、講評ということでお話しします。

今回、小松に来て、すばらしい里山を見せてもらいました。小松空港とコマツ製作所という産業に目が行きます。私は地理学者で、世界を歩いていろいろな風景を見る中で、日本の里山ほど世界に誇る穏やかな風景はない、ということをお話してきました。山があり、田んぼがあり、欧米人はここに来るとファンになります。

昨日は苔の里を見せていただき、日本を感じさせるものでした。「Wisdom House」という時代にふさわしいものを作っておられることは、素晴らしいと思います。滝ヶ原では、住民の活動を拝見しましたが、すべての橋が一望できるような工夫をしていただきたいと思います。ジビエ施設も見学しました。ジビエというのは、豚と一緒にいることがよくない、ということだと思われている人が多いのではないかとありますが、私には不満でした。ジビエにはジビエの個性があります。

今日の講演ですが、白肌先生は日本の里山についてでしたが、テキサスからお帰りになって、特にそうお感じになったのではないかと勝手に想像しました。暗黙知には、その土地の人の人柄や、何がよいものなのかという価値観も含まれる、という素晴らしいことをおっしゃいました。こうしたことは、農村の人たちと、外部の人たちの交流で生まれるのだと思います。そこに外国人が加われば広がります。このように里山の活動を行う人たちがいることは、心強いことです。

苔の里の有川さん、人は減ったが、ここに価値を見出す人が少しずつ増えたことは良いことです。移住者が多い地域でも、出ていく人は大勢います。出たい人は出ればよい。しかし、ここで住みたいという人がいる、外国人でもいい、それも一つの発展です。

林先生は、縮小の活性化とおっしゃいました。私は、過疎問題の座長として長くやってきましたが、人が減るのは避けられないが、少ない人間でよりうまくやっていく、そういう新しい仕組みでパワーアップしていくことができるということを説いています。



私は早稲田の学生を農村へ連れて行くことは、30年以上前に始めました。24年間、青森の漁村を考えるために学生と行きました。ここでは、若い後継者も帰っています。

人の世話をすることで人間は成長します。交流は違う人間と付き合うことで広がります。違う人が来たら、いい感じで付き合っほしいと思います。

今日は、内容の濃い話を聞かせていただきました。地元の人も外部の人も、違う目で自分の地域を見てもらい、人の話を聞くことも良いことです。地元の活動も活発ですが、相手の話を聞きながら、ということも必要です。

素晴らしいフォーラムを開催していただきありがとうございました。小松市の方々には、市長はじめありがとうございました。

■ 閉会の辞：里山活性化協議会会長 高 富師彰 氏

令和4年度地域塾、農村文明創生日本塾フォーラム2022小松の閉会にあたり、一言ご挨拶申し上げます。本日、はるばる全国からお集まりいただいた首長はじめ有識者の皆様には二日間にわたり、小松の里山地域をご視察、貴重なご意見をいただき、御礼申し上げます。また、地元ご参加の皆様におかれましては、お忙しい中ご参加いただきありがとうございました。北陸先端科学技術大学院大学の白肌先生はじめご講演いただきました皆様ありがとうございました。

さて、今回のフォーラムは、「持続可能な里山運営を考える」をテーマに行いましたが、私が会長を務めます里山活性化協議会におきましては、平成22年に前身の「こまつ SATOYAMA 協議会」の開設から10年あまり、事業を継続して参りました。これはひとえに関係各位の日々の絶え間ない活動の結果だと思っております。将来に向けた事業の担い手になる若年層の確保など、重要な課題を抱えているところであります。本日、ご参加いただいている協議会会員ならびに関係者の皆様には、日々、各団体や個人において森林、里山における環境保全や、市内外からの交流人口の拡大に多大なご尽力をいただいているところですが、本日の講演や、意見交換会などで、これからの活動のヒントをつかんでいただければ当フォーラムの開催は大変、有意義なものになったのではないかと思います。本日、ご参加いただいた皆様のさらなるご活躍と、ご多幸を祈念し、簡単ですが閉会のご挨拶とします。本日は本当にありがとうございました。

以上